

## 「愛顔(えがお)あふれる愛媛づくり」

平成28年度「知事とみんなの愛顔(えがお)でトーク」知事講話

開催日時：28.6.3(金)

開催場所：弓削地域交流センター

どうも皆さん、こんにちは。今日はそれぞれお忙しい立場であると思いますが、貴重な時間を割いていただきまして「愛顔でトーク」に参加いただきましたことをまずお礼申し上げます。30分ばかり地元に関連すること、政策展開等々を中心に少しお話をさせていただきたいと思います。

### 【瀬戸内海島しょ部のサイクリングコース】

おとといから6月に入りましたけれども、5月の頭はカレンダーの関係で連休が続き、ゴールデンウィークといわれるのにふさわしい状況になりました。私も2日間だけ休ませていただきまして、家内とどこへ行こうかと相談した結果、いろいろな振興策にも結びつく材料が自分の中に入って来るであろうということも踏まえて、初日は「ゆめしま海道」をサイクリング。2日目は今治に泊まって翌日は岡村島のほうから「とびしま海道」をサイクリングするという2日間を過ごさせていただきました。自転車を積んでこちらまで5月の頭に来させていただいたのですが、公用車は使っていないです。初日は多々羅の海の駅と言ったほうがいいように思いますけども、大三島のところで車を止めて、そこから自転車に乗って因島まで渡って、船に乗って生名に渡りました。そこから弓削のほうまで行って弓削を1周して、佐島に渡って佐島の先まで行って、生名島をぐるっと回ってまた船に乗って大三島まで帰ると、だいたい85kmぐらいです。僕は弓削を1周したのは、実は初めてだったんです。ずっと南のほうへ行ったら折返し地点と書いてあったんです。でも地図を見たらどんどん行けるので行ってみようかと行ってみましたら、なるほど、と思いました。とんでもない上り坂だったんですね。でも、そのの上り切ったところが、恐らく弓削では最も美しい風景が味わえる場所だと思いました。パノラマの世界が待っていました。ずっと戻って来て、佐島も南下して行ったのですが、林の中をくねくね上り下りしながら行くと、最後にブルーのラインがUターンのラインなんです。要はここで行き止まりでUターンする。多分、Uターンラインはあそこだけだと思いますけども、その先端には絶景の砂浜がありました。生名は非常にゆったりとした1周でありまして、これに岩城橋が結びついたら、一気に上島町4島がサイクリングコースのメッカになるだろうということを実感いたしました。翌日は、朝8時半の船に乗りまして、岡村のほうに渡って、そこからずっと広島側の先端の蒲刈というところまで往復しました。だいたい往復で80kmぐらいだったんですが、愛媛側はすごくゆったりしていて気持ちよかったです。広島側に入ると上り坂があつて、ただこれも好きな人にはこたえられないだろうなということを感じました。岡村から大崎下島は広島側ですが、まちづくりも非常に個性的なことに取り組んでいて、島の文化に触れるには各島を回らなければ分からないだろうなということを実感したところがございます。

### 【島しょ部の課題と対策】

そんなこともあって、サイクリングの話から入らせていただきましたけれども、島には独特の問題がありまして、離島であるが故に、例えば救急の問題、医療の問題等々でも、ある意味では陸地部と比べるといろいろなハンディがあります。例えば、この上島では救急車搭載型のフェリーの運航を実現することによってカバーしているわけですが、実はこれは参考にさせていただきました。今の仕事の前に松山市の市長の仕事をしていたときに、忽那諸島、中島町というところと合併いたしました。それまであまり考えていなかったのですが、やはり島しょ部の救急体制を整えるには不十分であるという結論に達しました。どうすればいいかということを経験しながら、費用対効果、コストのこともありましたので、上島の消防救急艇、これは救急車を搭載して火災のときにはそこから消火活動もできるもので、これを松山市も導入しようということで、運用の話などもお聞きして参考にさせていただいて、松山市に導入した経緯がございます。実は、上島で使っていた古い1台は、今、松山市が引き取って松山市で運航されているという、そんな連携もできるようになりました。島のさまざまな問題、水の問題もあります。水は、海底の送水管の場合もあれば、海水の淡水化の場合もある、これも私が松山市長時代に忽那諸島で経験してきたこととさせていただきます。そんなことで、いろいろな島しょ部ならではの対策を常に考えていかなければならないということをつくづく感じております。

#### 【人口減少問題】

そこで、やはり元気にならなかつたら島が衰退してまいります。今、実は日本全国が苦しんでいます。日本人全体が減っているんですね。1億2千万人の日本人が、30年、40年たつと9,000万人まで減るであろうとされています。昨年、東京圏域、これは神奈川県とか千葉県が入るのですが、ここは5年間で50万人ぐらい増えているんです。ここ以外、初めて大阪も含めて全て人口が減りました。愛媛県でも今までは松山市だけは減っていませんでしたが、昨年は全市町で減少ということになりました。これは、もう愛媛だけではなく、全国の地方が抱えている共通の課題であります。これをどうするかということをお話すると、まず1番大事なことは、出生率を高めること。それともう1つは、愛媛県から東京に人を取られないように、人口の流出を食い止めるにはどうしたらいいかということをお話すること。それから、東京にたくさんいるわけですから、東京にいる人たちをどう地方に呼び寄せていくか、人口の流入を実現するには何をしたらいいのか。出生率を高める、流出を食い止める、流入を促進する、この3つでやれることをやっていくということに尽きると思います。具体的な話は後ほどの議論の中でさせていただきたいと思いますが、そんなことからいろいろな政策提案をさせていただいているところでございます。

#### 【自転車を活用した観光振興】

また、地域を元気にするにはおよそ2つの方法しかないと思います。1つは、そのエリアでつくっているものやサービスを外に向かって売っていくことで活性化させる。もう1つは、外から人に来ていただいて消費をしていただく。観光などがこれに当たりますね。究極的にはこの2つしかありません。そこで、地域の皆さんと連携しながら、例えば人を呼び込むということに関して言えば、いろいろな工夫をしなければならないと思っています。実は、冒頭でお話したサイクリングも最終的にはそれを狙っています。観光振興というのは、どこの地域でも必ず取り組むジャンルでございます。だから競争も激しいです。よほどのことをしない限り、なかなか多くの人に振り向いてもらうことができません。よ

ほどのこととは一体何なのか。これはオンリーワンの政策を追求する。そこしかないよ、あの分野だったらあそこが1番すごいよ、そういう発想で磨いていくのが1番の近道であろうと考えました。5年前、その中で選んだのがサイクリングだったのですが、これには背景があって、日本では自転車というと、まだまだ通勤、通学、買い物に使う移動手段と捉えられている方がほとんどだと思うのですが、一步海を渡って海外に行きますと別世界が待っています。自転車というのは、健康と生きがいと友情を人々にプレゼントしてくれる道具であるという考え方ですね。よく見かけるようになったサイクリングの恰好をしている人たちも、日本では若い人がまだ多いのですが、アジアやヨーロッパに行くと、ほとんど40代、50代、60代の方ばかりで、むしろ若者のほうが少ないぐらいです。考えてみるとマラソンなどもそうでした。10年前、市民マラソンがあんなにはやるとは誰も思っていなかったはずで、42km走るなんてどうなってるの。普通の人ではできっこないと思われていたものが、今は全国で1,700のマラソン大会が開催されるようになりまして、各地域においては、活性化のために絶対必要なイベントにまで育っているのが現実であります。例えば、愛媛マラソンも最初やったときは3,000人しか来ませんでした。定員4,000人で始めたのですが3,000人で、第1回大会、7年前は定員割れだったんですね。ところが、今7年たってどうなったかという、1,700のマラソン大会で、全国で走った人の人気ナンバー1になり、2、3時間で瞬く間に1万人が埋まってしまうという大会になりました。最初は定員割れで悩んでいた1回目がうそのように、今は「何で出れないんだ」と苦情が殺到するような大会に育って、それに経済効果が結びつくようになりました。自転車は、マラソンに続いてどんどん広がっていく新しいジャンルとして、これから成長を遂げていくことは間違いないと思います。現に全国に広がりつつあることはニュース等々でも取り上げられているとおりで、東京などで今1番頻繁に発生しているのが自転車の盗難事件であります。そういう時代に入ってまいりました。

### 【世界に広がるしまなみ海道の魅力】

そこで、何とんでもこちらのエリアには、しまなみ海道があるということ。これは最大の強みであります。なぜならば、私たちは身近に感じているしまなみ海道であります。2014年3月にアメリカのCNN放送局という番組があるんですが、ここが世界の7大サイクリングコースを選んだんです。その中の1つに、日本ではたった1箇所しまなみ海道が選出されています。海外のニュースでもしまなみ海道がどんどん情報発信されるようになっていきます。さらに、地元の皆さんのご協力をいただいて、2年前にこの上島町も含めて実施した世界サイクリング大会、このときは日本最大規模の8,000人という大会になりましたけれども、31カ国からの参加をいただきました。彼らが「本当にこれはすばらしいコースだった」ということを今で言うSNSですね、Twitter、Facebookを通じて仲間たちにどんどん情報発信を勝手にしてくれるんです。その結果として、アメリカの情報発信と世界大会の成功によって、今、週末になると海外から当たり前のように訪れるような空間ができました。ただ、ここで問題は、待っていては消費に結びつかないということなんです。やはり、その地域のおいしいものや特産物の情報が常に発信されて磨かれて、いいなという声が広がっていくと、当然来る前にそういう情報をキャッチして来ますから、来たときにそこで消費活動が生まれるんです。じっと待っていても自転車はサーっと行ってしまいますから、お金は落ちませんということに必ずなるんです。その情報発信をどうする

かによって、幾らでも消費を呼び込むことができるということは、各地域でこれからぜひお考えいただければと思っております。まさに今、しまなみ海道が真ん中であって、それだけでは濟まないよと。こちらには「ゆめしま海道」がありませ。こちらには「とびしま海道」がありますよ。もっと言えば、陸地側にも愛媛県には各市町にリンクする形で、今サイクリングコースを整備していますので、そういったものを網羅的に発信することによって、1泊、2泊というような観光客の誘致にもつながってくる。しかも、別にサイクリストだけでなくいいんです。「しまなみというのは有名なしいね。1回走ってみたいな。でも、自転車持っていないから」レンタル自転車があるわけです。そういう人たちは家族で車でやって来て、宿泊してレンタル自転車で走って食事をして、消費をしていただける方々でありますから、この段階に入ってくるとまたグッと上がってくるということでもありますので、そんなことを考えながら進めているとご理解いただければと思っております。

### 【ドクターヘリによる救急医療体制】

さて、次に先ほどの救急の問題なんですが、県の仕事をいただいてから、さらに県として何かできないかなということを考えました。当初はお金の問題もありましたので、時期をずっと見ていたのですが、ヘリコプターを使うことだったんです。これについては、愛媛県には防災用ヘリコプターを1機所有しています。これは山火事や災害のときの救助等々に当たるヘリコプターですが、これを病院に搬送するようなことにも活用するという事で、防災ヘリをドクターヘリ的にも活用するというようなことで対応してまいりました。しかし、愛媛県の山間部や島しょ部のことを考えると、やはりドクターヘリ専用の体制を取るべきだと判断しまして、2期目の公約に入れさせていただきました。どういうものかという、ヘリコプターの中にストレッチャー、簡単な治療、場合によっては手術もできるような機材を常設しまして、そこにドクターヘリ専用のお医者さんと看護師さんに張り付けていただく。県立中央病院の屋上にヘリポートをつくって、必要なときにヘリコプターで搬送する。その移動中にも治療を行うという体制のことだったんです。もちろん、機材の導入や受入れ、基地の整備、お医者さんの手配等々、これはかなり難事業であります。来年ぐらいには何とか実現できるようにするべく、今着々と準備をしているところでございます。お隣の高知県はすでに導入しています。本当に緊急の手術を要する場合には大いに活躍しているのですが、高知の場合は山間部が多いということもあって、この前高知県知事に聞いたら、年間700回ぐらい出動しているということでもあります。愛媛県はやってみないと分かりませんが、そういったことで人の命を救うことに結びつけられればと思っております。

### 【愛媛県への修学旅行誘致】

こちらのほうにグリーンツーリズムで活躍されて、人を呼び込むということに直接結びつくような事業展開をされているグループの方もいらっしゃるのですが、ここと修学旅行を結びつけようということで、今、タイアップしながら進めています。実は、修学旅行も松山市長時代に取り組んだ経緯がありまして、当時松山市は意外なことに修学旅行はほとんど来ていませんでした。年間3校が平均だったんです。もったいないということで、どこに活躍していただいたかという、島しょ部でありました。広島から船で中島に寄港していただいて、中島で農業、漁業体験をやっていただき、道後温泉で1泊というコースを提案して売り込みをかけるようになったんです。特に島ならではのおもてなし体制をどう

するかということをお皆さんと一緒に考えました。結論として何をやったかということ、広島から船で大阪あたりの高校生が乗った船が中島に接岸するんです。そのときに島の幼稚園児たちが全員集合してくれて、旗を振って歓迎のご挨拶をします。上陸した後に漁業コース、農業コースに分かれて、みかん狩りあるいは地引き網といったものを体験していただいて触れ合っていた中で、また船に乗って中島港から出航して行くのですが、このときにまた幼稚園児に集まってもらって、紙テープでさよならするというのをやったんです。ドラが鳴って紙テープが切れるまで「お姉ちゃん、お兄ちゃん、また来てね」って子どもたちが笑顔でやると、びっくりしますよ。都会の子はそんな経験をしたことがないですから、感激のあまり甲板でみんな泣きまくって、これを「24の瞳大作戦」と名付けたんですが、これが非常に噂を呼んでどんどん増えてきて、年間3校だった修学旅行が、今、松山市100校を超えています。それを県全体でできるようにということで、民泊とも連動しながら考えていただいています。しまなみグリーンツーリズムだけで今決まっている定例計画、この時期だけです、7校なんです、850人。これだけの修学旅行が来るということは、ファンがつかれるという可能性があるんですね。大人になってからまた来るとか、帰った後に口コミしてくれるとか、そういうことも必ず活性化に結びついていくのではなかろうかと思っております。

#### 【今治圏域の産業の特色】

さて、島と言えば今治島しょ部エリアは産業でいえば1次産業と造船と海運ということになりますが、造船でも新しい取り組みが今年度スタートいたしました。これまでこれだけの造船所があるにもかかわらず、人材確保の点では非常に弱かったところがございます。なぜならば、愛媛県内の県立高校に造船の技術を教えるコースがなかったんですね。調べてみたら、ほとんどがこの近辺ですと高知県の高校か長崎の高校で造船を学んだ学生を新入社員としてスカウトするという状況だったんです。そこで、今年から今治工業高等学校に機械造船科造船コースを正式に設置いたしました。まさに地元で工場がいっぱいあるわけですから、民間とタイアップして、将来このエリアの造船を支える人材を地元で育てるという体制を取ることになりました。これは人材育成の面において非常に大きな貢献につながると大いに期待しているところでございます。そして、タオルについては2年前に老朽化していた繊維関係の研究所を新しく建て替えました。今治タオルを技術面で支える研究所ということになりますけれども、本当に地元の業界が苦しい時期を乗り越えて、高品質にこだわる製品、ブランド化も追求して乗り越えてきました。その結果、今、タオルといえば今治ということで国内でも認知をされ、海外でも大いに知られるようになってきました。私どもの仕事は、さらにそれを加速するために側面的にどんどん売り込んで宣伝するというのですが、やはり紹介するときも繊維産業技術センターとのタイアップで培った技術力がありますから、何が違うかが一目瞭然なんですね。この前、テレビ番組に出て、よそのタオルとは全然違うんだと、水槽を持って来てもらって今治タオルと一般のタオルの切れ端を同時にポイっと入れると、今治タオルは5秒以内に沈むんです。一般のタオルはずっと浮いています。吸収力が違うんです。今治タオルが沈まなかったら逃げようと思ったのですが、本番でもちゃんと沈んでくれました。その後調子に乗って、ほら見たでしょと。今、帝国ホテルとか日本を代表するようなホテルでも今治タオルが使われているんです。もっと言えば、今治タオルを使っていない日本国内のホテルは一流とは言えない

と言ったら、それはやめてくれと全国のほかの知事から苦情があったのですが、それぐらい性能がいいのは間違いないです。さらに今、もう1つ今治地域は縫製も盛んですね。この業界も大変苦しんでいて、この前、縫製の組合の皆さんと話して何かいい方法はあるかなということ、みきゃんを使ったTシャツを大々的に組合で扱って見たらどうかということで、今、製作に取り掛かっているところでございます。みきゃんだけでもいいとは思いますが、前はみきゃんで後ろはダークみきゃんとか、そういうTシャツだったらおもしろいということで、そういう製作にも取り掛かっているところでございます。こうした地域独自の産業をどうサポートしていくかということのも県政の大きな課題でございます。

### 【県の試験研究機関と商品のブランド化】

そして1次産業については言うまでもありません。これは今治圏域だけではなく、南予も含めた全県のお話であります。国のほうでは今、TPPの問題で今後どうなるのかという議論をしているようですが、はっきり言って、どれだけの影響があるかさっぱり分かりません。なんせ情報が全然ないんです。ただ、感覚的に想像すると、1次産業が1番影響が出てくるであろうと。その中で畜産等々への影響が1番大きいのは、今の関税の高さからいっても間違いないと思います。これを乗り越えるためのブランド化、よそのものとは全く違うというブランド化をどうするかということで、これまで愛媛県では畜産研究センターと養鶏研究所の職員が頑張ってくれまして、「媛っこ地鶏」であるとか「甘とろ豚」、それから去年ようやく到達した「愛媛あかね和牛」とか、いわばTPP対策のブランド品種を開発するために力を入れてきました。こちらでもレモンを使った「レモンポーク」であるとか、それぞれの地域にもありますけれども、代表選手がうまくいけば裾野は全部広がっていきます。柑橘でも今年愛媛県産は他県産と比べて値段がよかったのは、種類の豊富さと、その中で特化して戦略商品として磨いてきた「紅まどんな」の存在が非常に大きかったです。「紅まどんな」の産地ということで、愛媛県は高級なものをつくっているんだというイメージが広がっています。しかも、生産者が頑張っただけで本当に良品質のものを提供していただいていますので、僕も売るときに大変売りやすいという環境がございます。柑橘については今年は非常に値がよかった時期でありました。そして、このよさというのは海外でも絶対通用すると確信しています。先般、マレーシアに行ってみましたが、マレーシアでは甘平という品種が時期だったので、「クィーンズプラッシュ」という外国名をつけまして売り込みをかけました。1玉1,200円、全部売り切れました。日本のものはいいというのはみんな分かっているんです。どこかの国は危ないというのも分かっているんです。どことは言いませんけれども。それで試食したら「なんだこりゃ」もう飛ぶように売れます。ちなみにその前の年に台湾で、こちらは温州みかんの小玉という小さいものを売ったんですが、このときは1個200幾らで、これも全部売り切れました。確かに高いです、運送コストもありますから。でも、日本の農産物に対する信用と憧れ、そして実際に食べてみたらおいしいという感動。これはあちらの国の富裕層がぜひとも手に入れたいものなんだということ、そこにマーケットがあるということは間違いない、効果的にそれを見つけていくのが自分たちの役割でもあろうかと思っています。もちろん、その基盤を整備するための事業であるとか、あるいはこれは決定打ではないのですが、鳥獣被害の対策だとか、いろいろなこともあわせてやっていかなければなりません。農業・漁業・林業、

それぞれに手を打っていくのが現状であります。これは南予のお話になりますが、漁業については今年の秋から水産研究センターが頑張っていて、新しい品種、全身マグロのトロ成分を持つ2kgの大きさの「スマ」という魚の完全養殖に成功しましたので、この秋から販売を始めます。林業については新たな工法であるCLT。あまり聞いたことないと思いますが、今までの合板はスギやヒノキを縦にくっつけてましたが、これを交互にクロスさせるんです。そうすると格段に強度が上がります。外国ではこれは当たり前になっていて、今では10階建ての建物まで建築物として認められるようになりました。日本はこれからです。恐らく、日本の国内でも将来、5階建てぐらいまでは認められる可能性がございます。そうすると、新たな需要が飛躍的に生まれることとなりますが、先般、民間とタイアップして西条のほうにCLTの民間の工場を県と一緒にやってつくる計画が正式に決まりました。あらゆる産業の現状をしっかりと見つめて、可能性を見つけ出し、そこに集中的に生き残るための政策を展開する。こうしたことを積み重ねて愛媛県の発展に結びつけていきたいと思っております。

またいろいろお話したいのですが、30分たちましたので私の話はこのあたりで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。